

ビハーラレポート

No.16

SEPTEMBER

1995

CONTENTS

セミナー 木村然二郎 おだやかに老い死を迎えるために	2
Book Review がんの苦しみが消える	18
INFORMATION	19

ビハーラ Vihara

休養の場所、気晴らしをすること、僧院または寺院

『漢訳対照梵和大事典』

- 一、病人に供給す 二、病のために医薬の具を求む
- 三、病者のために看病人を求む 四、病者のために法を説く
- 五、余の比丘のために法を説く 六、法を聞いて教化す
- 七、大徳のものに供養し、恭敬するために 八、聖衆に供給するために
- 九、深経を読誦するがために 十、他に教えて深経を読ましむ

『十住毘婆沙論』卷第十六

講演

ビハーラセミナー

おだやかに老いと死を迎えるために

— 生きていることはすばらしいことだ —

1995年7月22日 鷹巣町 鷹巣阿仁広域交流センター

木村然二郎

弘前市 木村内科小児科医院 院長

はじめに

お晩でございます。唯今、ご紹介にあずかった木村です。この『ビハーラ』の会に呼ばれた事情をご説明しますと、一昨年青森県の浅虫というところで東北六県の曹洞宗の和尚さん達の集まりがあったわけですよ。それが『東北地区曹洞宗青年会東北地方集会青森大会』。それに講師に呼ばれたわけですよ。「青年宗侶の安心の再考」と随分難しいテーマを出されたんですけれど、私は「医のころ・仏のころ」という副題で、医療に仏心がなければこれからの医療は成り立たない、と言うことを強調したんですね。その時に秋田県から五人ばかり曹洞宗の和尚さんがみえまして、やっぱり秋田衆なもんだから言葉で解かるんですね。あんたも秋田だなんてことで。この大会ていうのはすご

いんですよ。すごいつて言うのは講師が辛い。二日にわたってやるもんだから、前の日お話しするでしょ、でね、和尚さん方って般若湯が強いでしょ、飲ませられるわけですよ、終わってから。飲ませられるのはいいいけれど、次の日質問があるわけですよ、こっちは。酔ってられないんですよ。それでも12時まではお付き合いしましたね。お寺さんてのは強いですね。で、次の日は質疑応答に答えまして2時間ばかりディスカッションして帰りましたが、へとへとになりました。

その時に小坂の鏡得寺さんと一緒になりまして、秋田にビハーラというのがあって話しに来てくれないかということで、私も浅虫でしゃべったことぐらいなら大丈夫だなとたかくくって、いいですと引受たのが今回の話しの始まりです。

そこでどんな集會か知りたいものですから、今迄の講師のお話のテーマと内容を聞かせてもらったわけです。私も話しの内容を決める都合上。そしたらこのビハーラリポートが10何冊も送られてきたわけでしょう。これを見て私びっくりしましたよ。これはね、今も来るときに弘前から秋田に行くお医者さんに見せたらびっくりしていましたよ。これは誰が見てもびっくりします。

これだけの運動を、失礼ですけど秋田県の県北でなさっているということは素晴らしいんですよ。会場の人数はこの程度かも知れませんが、しかしパーセントからいくとね、東京に『医療と宗教を考える会』というのがあります。昨年九段坂でシンポジウムがありました、会が発足してから20年たっているんですよ。そして確か1500人位集まっていますよ。1500人集まっていますけど、私のように弘前から行ったり秋田から行ったりしているでしょ。大体東京の人口と周辺の人口を合わせて1500万人として、1500人は何パーセントだと思います。0.01%ですよ。ということは鷹巣近辺の人口を30万人として、その0.01%は30人。ですから30人集まれば素晴らしい大会になります。そう思えば、皆さんは自信をもてますね。だからこういう会を続けてく

ださるようお願いします。

いろんな方をお呼びしているんですね、この会は。はっきり言ってビビっちゃった。私が今日これからどれくらいのことをお話できるか分かりませんが、私は開業して25年になります。大学で勉強して、実際開業してからの経験から、感じていることを皆さんにお話しして、皆さんの御意見を伺って帰ろうかなと思っています。

生い立ちと医師になったいきさつ

レジメの最初は自己紹介がてらに、私の生い立ちと医者になったいきさつ。医者って言うのと医師って言うのと、皆さんどうお考えになるか分かりませんが、医者って言われるとお寺さんが坊主って言われると嫌がるのと同じで、医師って言われたほうがいいですね。

私は平鹿町の浅舞っていうところ、横手の在の出身です。横手中学、今の横手高校を出て、盛岡、仙台と武者修行しまして、弘前の医学部を出まして、大学で研究して、昭和46年現在地に開業しました。その間、病気で休学したりして、私なりにいろいろと経験をしたわけです。

何で医者になったか。私は商人の息子で、医者になる必要はなかったんですけど、私は7人兄

弟ですけれどね、3人病気で亡くしているんです。3人とも10才位で亡くなっているんです。逆縁と言いますが、親が泣きわめくだけ泣くんですね。それを見て子供心にグッときましたね。

私は兄弟の2番目なんですけど、うちの親父も物好きで、然二郎の然はうちが浄土宗ですから法然上人の然をとった。7人のうち1人位は坊主になってもいいじゃないかというつもりで付けたらしいんですよ。要するに一人ぐらいお寺に預けようかというつもりだったらいい。ところがさっきも言ったように、親の嘆きを見て坊主にならずに医者になってしまった。私が中学校のとき斜め向いに、私より1級先輩で今、十文字町の町長をしている西成先生が住んでたんですけど、あの人は頭がよかったです。よし、向こうの電気が消えるまでこっちも起きてやる、絶対眠らないって頑張りまして、どうにかこうにか医者になれましたけど。

まあそういう訳で医者になりましたけど、なぜ開業したかというところです。ここにお見えの方は年配の方はあまりいませんが、昭和43年、44年頃私は弘前大学の第二内科の講師・医局長の立場にいたんですけど、ちょうどこのころ学生運動が盛んで東大安田講堂焼き打ち事件なんてあったんです。知

らないでしょう。この東大安田講堂焼き打ち事件は東大紛争と称して、今のオウム真理教のように全国を騒がせたんですね。

それは何からスタートしたかというところです。インターンというのがあるんですね。今はなくなりましたが。医学部にはいると、教養過程を2年やって、それから専門過程を4年やって、その後にインターンを1年やるわけです。ま、実習ですね。見習いです。それが無給なんです。他の学部は4年でしょ。他人様より2年も長く入って、さらに1年を無給で働かせるとは何事だ、と言うことから始まったんです。

インターンは学生なのか医者なのか分からないんですよ。不思議な存在だった、この1年間。医療行為をやっていいのかどうか分からない。今だったらさすがに問題になるでしょう、医療行為をしたわけですからね。だけど給料をくれないわけです。田舎の病院では大歓迎した。私は大学病院でインターンをしたんですが、大学病院では邪魔もの扱いですよ。各科を回って実習するわけですが、「ああ、インターン、大館病院に行つて」とか、「ちょっと鷹巣病院に行つて」とか言われるわけです。私も下北のむつ病院とか百石病院とかに行かせられましたけど。そういう病院ではたらいて小遣い

金を稼ぐわけですが、医者並みとは言わないがもう少しましな給料をくれという、いわゆる経済闘争から始まったんです。インターン廃止運動という経済闘争が、いつのまにか政治闘争になってしまった。そして全学連、全共闘というラジカルなグループがあってすごかったんですよ。

私はインターンをちゃんとやりました。私はインターン廃止運動の頃、講師・医局長をやらされました。この講師・医局長というのは、教授を横綱とすると助教授が大関ですね、関脇の立場なんです。相撲では関脇が強いと面白いということになっているんですけども、非常に微妙な立場なんです、関脇ってのは。相撲でもそうでしょ、ちょっと油断すると下がっちゃう。医局長っていうのは下からは突き上げられるは、教授からは何やってるって言われる、じつに嫌な立場なんです。で、「体制内改革」、「体制外改革」という言葉がはやったんです。今でも使える言葉ですね。こういう世の中ではどうしようもない、なんとかして改革しようと、これは誰でも思いますよね。皆さんの職場でもそうだと思いますよ。私方は体制内改革派で、現体制が悪いのは分かっている、けどあまりラジカルじゃなく話し合いで改革していこうとした。体制外改革派

は違うんです。ぶつつぶしてやれ、こんな体制は駄目だ、とね。全国の医学生が3年間入局を拒否した。昭和44年、これが一番ラジカルでしたけど、45、46年卒業生がね。今考えると甘かったんですけど、その当時は真剣だったんでしょね。入局拒否というのは、要するに大学に残らないでドサ回りする。診療所に入って10万円の給料をもらったら3万円は学生運動にカンパする。全国の医学生が3年間入局しないと、日本の医療体制はぶち壊れるだろうと考えたわけです。こういう当時、医局長・講師なんてさせられたら、とてもじゃないがやってられないと思って、私は子供もいなかったもんですから大学に残ってもいいと思っていたんですけど、開業したわけです。

本を出版して

私は私なりに医者になったからには少しでも皆さんのお役に立ちたいと思いまして、私なりにやりました。私の考えが死ぬまでに30人位理解されておったら俺は死んでもいい、死ぬまでに木村の話は俺はよく分かるという人間が30人位いたらいいと思っていました。ところが患者さんにもいろんな方がいて、30人も俺の考えを分かってくれるかどうか不安になってき

た。そんなときに三浦和尚と会ったんですよ。（三浦義弘師・弘前市盛雲院住職）

皆さん弘前に来ればすぐ分かるんですけど、市内の西に曹洞宗のお寺さんがずーっと33ヶ寺ある。そばに新寺町と称して浄土真宗や浄土宗や日蓮宗のお寺が28ヶ寺ある。その門前町として栄えたのが茂森町です。回りをお寺さんに囲まれて開業しているようなもんです。ですから私のところにはいろんな患者さんがきますよ。お寺さんがあれば焼き場の職員もありますよね。石屋がある。花屋さんがある。酒屋さんがある。葬儀屋さんがある。今年は風邪が流行りましたね。みんな点滴に来て今日は一組そろったなという日がないわけでもない。（笑）ま、そういう所です。

で、盛雲院というお寺さんが禅林街にありまして、先代の和尚さんにご縁があって、私が死に水を取ることになったんです。ここの若和尚も変わり者で、曹洞宗では有名かも知れませんが、この和尚は和尚でやっぱり悩みがあったんです。というのは、やっぱり先代と自分とではやり方が違う。この人は永平寺に行ったあと、東京の神田寺というお寺に入った。神田寺というのは宗派に関係無く、友松圓諦という慶応の教授が創ったんです。そこでいろんな人を集

めて宗教活動をした。日本医師会長、武見太郎をはじめとして有名人もいた。そこに修行に行ったんです。親父さんも偉かったですね、永平寺終わって、また修行にやった。そこに10年もいてきた。友松先生の所での修行が素晴らしかったんです。で、弘前に帰ってきて挫折感を感じたんでしょうね。私も同じでした。で、ある時飲み屋で二人で喋り合って、自分達の思いのたけを書こうということで「祈りと手当て」という本を出したんです。副題は「医者にならなかった坊主と坊主にならなかった医者」と。この副題も気を遣ったんですよ。日本語は面白いもんで、ならなかったとなれなかったでは大分違うんです。

（笑）

これは呻きの本なんです。ミスプリントだらけの本なんです。この本を出したらものすごい反響があったわけ。私達にしてみればこういう活動をしているのは早いほうでないかなといい気になっていた。昭和62年ですからね。ところが、「生と死の最前線」という本があるということに気がついた。これが61年、私らより1年早いんですよ。皆さん、これは是非読んでおいてください。今は新聞に医療記事のない日はない。死とか宗教だとかターミナルケアだとか、ここ2~3年バタバタと増えま

したね。私達が書いた頃はこういう記事が載ってない頃なんです。

本を出したらいろんな所から、話をしてくれ、とやられたもんだから、いろんなことを書いた。最初は喧嘩して見向きもしなかった出版社が、1冊目が評判いいもんだから2冊目出しませんかっておだてるわけですよ。おだてに乗って、じゃあ出そうかって出したのが「白衣と僧衣」。これを三浦さんは法衣としたかったんですね。だけど僧衣の方が、私ら素人には分かりやすいんですよ。法衣というと裁判所の方を考えませんか。そこで、悪いけど法衣でなくて僧衣にしようよってことになったんです。これらの本を出して良かったなと思ったのは、私らの気持を分かってくれる人は30人ではなかった、ということが分かったことです。これが私の救いです。

医療の公共性と事業性

次に「医療の公共性」ということです。税務署は医院を事業に見たがるんです。厚生省は医療の公共性を重要視するんです。例えば今風邪が流行っています。当院の風邪薬は3日間で千円、大売り出し、なんてことが事業であればやりかねないんです。だけどそういうことをしたら日本の医療はバラバラになる。あくまでも薬価とい

う公定価格がある。アリナミンは何円にしましょう、とね。金のある人もない人も同じようにしよう、というのが公共性だ。最近では日本人が裕福になり、しかも長生きするようになったもんだから、医療費が莫大になっちゃった。今から数年前までは70才以上の医療費はすべて無料だった。

ひどい患者さんがいますよ、なかには。今日から医療費が只だそう、入院させてくれませんかと来た。私もびっくりしちゃった。でも、この人は俺が断ってもとなりの吉田先生や油川先生の所へいくんだろう。ここが駄目なら別とね。まてよ、この人を抑さえておいてひと言喋ねばね、と思って何日か入院させましたけどね。

只なら何でもいいのか。私ら税金は払いたくない。只っていったって誰が払うんですか。厚生省が払うんでしょ。厚生省は税金を使うわけでしょ。そしたらどうしても税金を上げなきゃならなくなる。税金は払いたくない、医療費は欲しいってことで一部負担金ということが起きたわけです。

それからよく私言われるんですよ。「先生、保険利かなくてもいいから高い薬出してくれませんか。明日にでも治るようなやつ。なんぼ高くてもいいから。」そんな人にかぎってけちなんですよ、

本当は。明日からこないんです（笑）。じゃ、高い薬がいい薬かってことなんです。新しい薬はどうしたって高くなります。一時流行ったアリナミンなんか今安くて5円位ですか。薬の値段はどうやって決めるかと言うと、アリナミンを開発するのに何十億ってかかる。だから新しい薬はどうしても高くなる。じゃあ、それが効くかと言うとなぜかあまり効かない。しかも副作用が起きやすい。新しい薬が必ずしも効くとはかぎらない。ですから高い薬がいい薬かと言うと、そうじゃない。一番効いて一番安い薬はなんだと思います。麻薬ですよ。麻薬は10円か20円ですよ。あと副腎皮質ホルモン剤、必ず効くのは。絶対効くなんてのはいくらもないんです。だから内科は、ああじゃないかこうじゃないかってやってるんです。（笑）

医療の根本 = 手当て

次に「医療の根本」はなんだろうか、ということです。私は手を当てがってやるということが根本だと思っんです。「手当て」です。今の人は手当てっていうとすぐに時間外手当てだとか当直手当てだとかを連想する。（笑）私は子供の頃、二郎二郎と呼ばれていましたが、母親が額に手を当て

て、ああ今日は二郎は熱があるなとって富山の薬をのまされてました。医者なんかまっすぐいけなかつたですよ。。最近はお医者さんが手を当てなくなっちゃった。大きい病院になればなるほど。病棟に連れていかれて、看護婦さんが看護記録を取りに来る。医者はその間何をしているかという、他のことをしている。で、病棟に来る。このごろのお医者さんは病棟に来ると患者の顔色も見ないで、看護記録を見てすぐに指示するんです。ブレスト（胸部写真）、おしっこ、血、ダダダと指示してすぐに帰っちゃう。患者の顔も見ないで。手をあてがうなんてもんじゃないですよ。毎日のように検査する。絶食が続くから健康なうちに病院に行かねばならなくなる。（笑）そうでしょ。絶食1週間もやられてみなさいよ。3キロぐらいすぐに痩せちゃう。丈夫な人ならともかく具合悪くて入院するんですよ。ある病院に行ったら言うんですよ。「カルテ見たらびっくりした。半月絶食さしていた。」平気で若いお医者さんが言うんですよ、愕然としました。鷹巣にはそういうお医者さんはいないでしょうけど、弘前にはいますよ。（笑）

昔は看病僧という人がおったんですね。要するにお寺というのは悩みのある人が駆けこんで来る所

だったんですね。姑さんと合わなくてここに何日か泊めて下さいという嫁さんもおれば、病気の人があれば富山の漢方薬をあげたり、お話を聞いたり、心配事相談所の職員みたいなことをお寺さんがやっていたわけです。あるお寺さんへ夜行ったとき、戸が開いているんですよ。鍵が掛かっていないんですよ。で、どうしてここ開いているんですか、といったら、木村さん、お寺っていうのはいつでもどんな人が来てもいいようにどこか開いているんですよ、それがお寺ですよと言うんです。なるほどな、と。住職というのは住んでるんですよ、そこに。この頃はそこに住んでいない、出て歩いてばかりいる住職がいる。ゴルフに行くんだかなにしに行くんだか、いつ行ってもあすこの住職はいねえ。(笑)昔の和尚さん偉かったですね。弘前というのは信仰心の篤い人が多くてね、身内の立ち日にお墓参りする人が多いんです。彼岸の中日だけじゃない。彼岸中日、お盆なんか木村医院の前は通行止めですよ。お寺参りのついでに木村医院に寄った、なんてね。(笑)ま、看病僧というようなことがあって、今ビハーラっていう言葉が出てきたわけですね。原点に帰っただけの話なんです。

医者というのは死と対峙することが多いわけです。ところがえて

して医者というのは死を怖がる。なぜかというと死、患者さんを死なせるということは、自分の医療の負けだと思う。それはそうかも知れませんが、自分が一生懸命やっても、とうとうおまいりしちゃった(死んじゃった)。医学の敗北だ、そう思うかもしれない。だけど私はそうは思わないですね。うまくおまいりさせるのも医療だとおもうんです。私の所から行った患者さんが悪くなった。看病するほうも大変ですよ。そろそろだなと身内の人を考えても、医者はまだ血を取ったり検査したりするんですね。点滴やって管入れて酸素やって。私の送ってやった患者さんも一生懸命そうやってる。「何やってるの、早くおまいりさせたら」というと、「怖いんです」というわけ。なに怖いことある、家族と納得の上ならうまくおまいりさせるのも医者だよ」って私は言ったんです。

枕経てのは死んでからばかりではなく、亡くなる前にうまくおまいりできるように読むのが枕経なはずですよ。今はみんな死んでからでしょ。今はお寺さんはお寺さんで大変なんだそうですよ。鷹巣あたりはどうか知らないけれども。お寺さんが行けばもう葬儀屋さんが来ていて、なんだか自分はベルトコンベアーにのせられて動かざるをえないってことを言って

ましたよ。葬儀屋さんがダダダッと予定をきめて。お寺さんの都合も聞かないでやるようなケースがないでもない。お寺さんも悩みがあるようですが、本当は枕経というのはそういうものだと思ってました。

臓器移植 脳死と心臓死の間

さっきの話をちょっと繰り返しますけど、インターンがなくなつたために死を見取るということを経験しないで医者になるということが多くなってきたんです、最近の医者は。私達のときはインターンにいた間には必ず死に水を取らせられるんです。家の人たちがみんなオイオイ泣く。泣いたところでいつ引き上げるか。死を診断するというのは恐いもさることながら、ご臨終って言った途端に動いたらどすべと思うとね。(笑)よくあるんですよ。(笑)ここだけの話ですよ。インターンに行ったときに、「木村君そんな時にどうすればいいか知っているか。いやあ、木村さんの心臓は素晴らしい、見ごと生き返った、とってしばらく様子見れば必ず死ぬから慌てるな。」(笑)5分か10分ぐらい様子を見てもいいんですよ。だから私は脳死や臓器移植に反対なんです。というのは、臓器移植というのは外科の方から出てきた

んですね。で、我々は呼吸が停止して瞳孔が散大して、心臓が停止すればご臨終と申し上げるんですね。

で、これは私の経験例ですよ。弘前で外崎寅吉さんといえば有名な庭師だったんです。部下を30人位もって、弘前の大きいお医者さんや地主さん、酒屋さんといったところのお得意の多い庭師だった。私はなぜか可愛がってもらって死に水を私が取った。脳死と心臓死の間、何分あると思いますか。これは誰も余り良く分からない。なぜかという、大きい病院になればなるほど管を入れたりいろんなことをしているから。結局ガンだったんですけど、88才にもなつたし、嫁さんの看病も非常によくて褥瘡も無かったんですが血管がはれて注射の針が入っていかない。針が入っても注射液が入っていかない。それで注射もやめた。毎日行くけどなんにもしない。いよいよ最後の日が来ました。ポケットベルで呼び出されていくとみんな集まっていた。ポータブルの心電図を持っていったんですね。心電図は動いているわけです。瞳孔は散大。呼吸は停止。ほら、ここが脳死なんです。この時間が。ちょうど庭の側の部屋に寝ておつたんですが、昔やった庭を見ているんだろうかな、などとしゃべりあって。心電図を見て、

まだ生きているんだよ、としゃべりあって。ピピー、ピピー、そして止った。これが心臓死。私のもった1例の症例ですけどね、脳死と心臓死の間は8分でした。

その8分間の間に、外科のお医者さんが肝臓なら肝臓を移植させてもらえないかと提案したのが始まりでしょ。日本人というのは心というものを非常に大事にしたもんだから、ものと心を別々に考えたくないわけです。西洋のことはあまり勉強したことがないけれども、キリスト教の考え方は、死ねば物である、だから簡単に考えるわけです。心は天に、ここにあるのは物体だと。御巢鷹山ですか、飛行機事故で何百人って亡くなったのは。日本人は最後まで遺体を探そうとする。探せば必ず火葬してお墓に入れる。外国人はそうじゃない。死んだものは仕方がない、物体などどうでもいいじゃないか。だから臓器移植に賛成しやすい。日本人はそうじゃない。ご臨終ですと言われてもまだあったかい。ここにおじいちゃんの気持があるんじゃないかと思う、泣きながら。だから私がマスコミに言いたいのは、どうして脳死と心死の間を縮めようとする努力をしないんでしょう。私は新聞や雑誌でこの間を縮めようという研究の記事を見たことがない。あったら教えてください。脳死の段階で移植

しなければ駄目なんだと言うならば、脳死と心死の間を縮めれば日本人の気持にあうように脳死も心死も一緒になって移植にも賛成するようになるかも知れないですよ。こういうことは全然聞いたことがない。今日ここで初めて言いました。

患者さんに一言

「患者さんに一言」ということで、医者に嫌われないためには病院をあちこち渡り歩かないこと。まず頭のいい患者さんているもんで、自分から診断して来るんですね。特にこの頃の若いおかあさん方に多いんですけど、マニキュアつけて口紅つけて子供連れて「うちの子風邪ひいたみたーい」ってやって来るんですね。いつからですかっていうと、「いつからだっけ、ばあちゃん」。二人で一人分しかしゃべれない。私はあなたに聞いているんだっていうの。「私わかんないパートにいつてるから」てな調子でしょ。熱は？って言う、「熱何時からだっけ、ばあちゃん」。座薬は？って言う、「何時さしたっけ、ばあちゃん」。「どうしてあんた連れてきたの」「うん何となく」。おしめはずそうしたらウンコが手についちゃった。そうすると、「あら汚い」だって。なに

が汚いですか、自分の子供だよ。昔のおかあさんは舐めただぐらいですよ。

今のアレルギー性鼻炎なんて病気じゃないですよ。昔はアオッパナたらしてるのはみんな丈夫。なぜアレルギー性鼻炎が増えたかと言うと、昔、杉の値段が暴落したことがある。一時外材で家を作ることが流行ったことがある。こちら辺もそうだと思う。杉の値段が暴落しちゃった。すると枝払いや下草刈りってやるでしょ。それをみんなほったらかした。そのために枝が延び放題になった。1本の木からものすごい花粉が出るわけです。諏訪湖に行ったときですね、白い煙が山肌になびいている。山火事かなと思ったけど山火事なら煙が上に昇るはずじゃないですか。花粉が風でフワーと飛んでるんです。下の山には赤くなった枝のついた杉が一杯ある。花粉症起きるのも無理はないなとつくづく思いましたけど、昔は、と言うよりも私が開業したころはアオッパナたらしめて鼻糞つけた子が一杯あった。今はいなくなりました。驚くなかれ生まれたての子供を鼻がグスグスするって耳鼻科に連れていくお母さんがいる。だまって寝せておいたほうがいいのと思うんですが。

今のお母さんは子供がつかれるとぐったりするものであることを

考えないんですね。子供を車にのせてバンバン飛ばして買い物に連れていく。1才未満だったらうちにおいてイヅメさ寝せでおいたほうがいいのに。ところが平気でジャスコとかイトーヨーカドーに連れていく。赤ん坊はお父さんやお母さんより体力がないでしょう。子供がぐったりするの当たり前ですよ。当たり前なんだけど何とも思わない。飛行機でも平気でのせるでしょ。将来中耳炎とか耳を悪くしないだろうかと心配してるんです。座薬をみんな安心して使ってるけれど、今は統計出てないけど、座薬を小さいときに何百個使った人は直腸ガンになるっていう統計が出ないとも限らない。座薬は注射より安心だ、なんてみんな使ってますけど、そんな統計が新聞に出たらパッと座薬が売れなくなりますね。みんな一斉なんだもん。

対治と同治

「対治と同治」ということについて。対治ってのはね、キリスト教的、ヨーロッパ的な考え方なんです。要するに病気と向かい合って治るまで徹底的に戦う。同治というのはね、治らないものは仕方がないということです。例えば75才の患者さんがおって肺ガンだと。手術は無理だ。若い人のガン

が早く転移しやすいというのは、ガンも若いわけです。だけど75才、80才位になればガンもそのくらいの体力です。だから転移しづらいんです。罹ってもおさまりやすいわけ。そしたらガンと一緒に長生きすればいいわけでしょ、。ガンが大きくならないようにしてもらって。それが同治なんです。この考えの根本に、「結核は治らないものである。けれど治らなくてもよいものである。」結核がエイズ並みに怖がられていた時代に、東大の岡治道という方が話した。戦前ですよ。結核ていうのは昭和30年代までは恐ろしいものであった。今は素晴らしい薬ができたから、結核っていわれたらバンザイしたほうがいいですよ。岡教授がなんでそんなことを言ったかということ、治した例もあるけれど、治らなくても生きている例をっぱいみてきたんですね。だから、「治らなくてもよいものである」と言った。現代に置き換えると、「ガンは治らないものである。けれど治らなくてもよいものである。」というふうに言葉を言い換えれば今でも通じると思いますよ。だからガンと共に生きる、ガンと共に老いるという生き方もあっていいじゃないかなというのが私の考えです。

最後に、「長生きをするために」ということ。開業医として25年間いろんな患者さんを見てきました。そうすると、長生きする人の家というのは大体分かります。みんなこころやさしく、嫁さんも姑さんも仲良くして、爺ちゃん婆ちゃんのために環境を良くしてやる。そうやってみんなで見取ってやるということに素晴らしいさを感じるんです。これからはまず80才まで生きること努力しましょう。なぜなら80才が平均年令ですから、その前に死ぬと損します。生命保険も年金も。80越えたらあと5年ということにして、次のことを考える。自分の殺せないものは食べないこと。と、どこまでになりますか。皆さん牛や馬や豚を殺せますか。せいぜい魚や鶏くらいでしょ。私はコレステロールとかなんとかロールとか難しいことは言わない。お年寄りに対しては。最近みんなおぼえてるけどね。「先生、高脂血症だそうでしょうすればいいでしょうか。」なんてでっかい声で入って来るんですけど、私は簡単に「豆腐、油揚げ、納豆でいい」って言ってるんです。せいぜい鶏くらいまで。そういう意味で、自分の殺せないものは食べないこと、という表現をし

ているわけです。

次に、「転ばないこと」。年寄りが転ぶとまず骨折する。立てなくなったら大腿骨頭骨折、手が上がらなくなったら上腕骨骨折。必ずといっていいくらい骨折。だから転ばないことが大事です。それから、「風邪をひかないこと」。風邪は万病のもとと言いますから。確かにいい抗生物質がでてきましたけど、ひかないに越したことはない。今年風邪が流行りまして、死ななくてもいいお年寄りをだいぶ失いましたけれど、風邪をひかないこと。それから、義理を欠く。弘前あたりではね、昨夜木村さんのお通夜でお寺さんに行っただけれど寒くて寒くて風邪ひいてしまった、てなことを良く聞く。お通夜さ行って風邪ひいて亡くなった人に極楽に引っ張られるくらいなら行かない方がいいべし、ていうと変な顔するんですね。

「だって先生、義理欠けばまずい」義理欠かないように無理して風邪ひいていいんですか、と私は言いたいわけ。次に「先祖を敬う」ということ。これはね、「平常心を持つ」ということです。この先祖があって現在の私があるんだということを認識するわけ。そうすると気持が非常に穏やかになる、と私は思う。病気になっても穏やかでいられる。それから、

「空気・水・土に親しむ」。これ

はね、私の見ている患者さんで寝たきりの人がいる。採血すると真っ赤な血なんです。まるでうちの若い看護婦と同じような赤さだ。酸素が多いんです。どうしてかなと考えたんです。その患者さんはね、結核やって寝たきりになっちゃったんです。もう80近いですよ。とっくにおまいりしてもいいくらい。毎日酸素やってるんです。ボンベで。そのせいでないかなと思うんです。肌がものすごくツヤツヤしている。皆さんはこういう酸素の多い環境に住んでいるからいいですが、東京にいったらあの空気の汚れ。よくここで生きているもんだなと思うくらいです。土を踏むっていうことも大事ですよ。それから「かかりつけのお医者さんを持つ」。そのお医者さんは患者離れのいいお医者さん。自分の守備範囲を守って、悪くなったら病院を紹介してくれる患者離れのいいお医者さんにかかる、てことが大事じゃないかなと思います。

時間があればいくらでもおしゃべりしたいんですが、足りないところは質問の時間にしたいと思います。終わります、有難うございました。（拍手）

質疑応答

木村：ちょっと最初に時間をもらいます。私一番お話ししたかったのはね、ここにあげた本の話なんです。

「医療と宗教を考える会」というのが東京にあります。ここに来られている方には是非入会をお薦めします。年会費3000円ですが入会すると講演の議事録というのが1冊来ます。もっと欲しければ実費で買えます。これまで50冊か60冊出てますが、皆さんが読みたいなという内容のものばかりです。そこでお薦めするわけです。（医療と宗教を考える会 〒151-00 東京都渋谷区代々木3-36-8 東高代々木ペアシティ102 TEL03-5351-0324 FAX03-5351-0324）

「おっしゃんの茶話」藤本幸邦という長野の曹洞宗のお坊さんが書いたんですが、この人の詩を読んでもみます。「履き物をそろえると心もそろえ。心がそろえと履き物もそろえ。脱ぐときにそろえておくと履くときに心が乱れない。誰かが乱しておいたら、黙ってそろえておいてあげよう。そうすればきっと世界中の人の心もそろえましょう。」これは素晴らしい詩ですね。このポスターを曹洞宗で作っていますので、袴田さんにも頼んで是非玄関に貼っておくこ

とをお薦めしたい。

「医者と患者と病院と」砂原茂一という人は外科の大家です。結論からいえば、治らない患者は治らないままに素直におまいりさせてやろうということ。医者と患者と病院が手を取り合って病気を治していくのだが、医者というのはパイロット（水先案内人）に過ぎないのだ。医者は思い上がってはいけない、ということ。

「カラスはどれほど賢いか」弘前はカラスの被害の大変な時期があったんですが、この本はさっきの同治と対治の話ではないですが、カラスを追っ払うだけじゃ駄目でカラスと同居するような気持にならなきゃいけないというのがこの先生の意見。4羽のカラスに発信機をつけてどのような行動をするか追跡したんですが、たったこれだけのことで立派な学問になるんだという分かりやすい本です。

「敗者の維新史」これは会津藩のことです。佐幕にたった会津藩は最後に青森県の下北に流されますね。たった3万石にへらされて。今青森県は三内丸山遺跡や白神山地などで脚光を浴びてきていますが、天皇側から見た歴史ではなく、負けた会津側から見た維新史です。こういう見方もあるんだという、読みやすい本です。

「医師ゼンメルワイスの悲劇」今

からたった100年前の手術とはどういふものであったかという、消毒もしなければ手も洗わなかった。婦人科に産褥熱がものすごく多くてお母さん達が亡くなっていた。ゼンメルワイスが消毒を主張しても誰も認めてくれなかった。認めてくれたときには、すでに死んでいた。悲劇ですね。今なら当たり前前のことですが、当時ゼンメルワイスがいかに苦労したかという物語です。

「進化論を見直す」遺伝学を勉強した人は分かると思うんですけども、現代の生物学会ではメンデルの遺伝の法則が体勢を占めている。人間はメンデルの法則と突然変異によって進化してきたといわれるが、それだけでは解決できない問題が一杯ある。細菌とか下等動物ではどうしてもメンデリズムだけでは理解できない問題があるが、それをやろうとすると学閥に阻まれる。東京でこの本を出版すればもっと注目されたんでしょうが、残念ながら弘前でだしたもんだから。それでもイギリスのサイエンスという科学雑誌に載った有名な論文です。

「パール博士の日本無罪論」パール博士というのはインドの弁護士で極東裁判の弁護をした方です。この博士だけが極東裁判のやり方がまずいと言っている。勝ったものだけで裁判ができるだろうか。

負けた国にも弁護があつて当然ではないか。あの裁判は本当に正当なものだったろうか。勝ったものだけの裁判では負けたものは無罪だと主張しています。なにも私は日本は無罪だと主張しているのではなく、マスコミで従軍慰安婦の問題や東南アジアでの日本軍の問題などが取り上げられています。一方の主張だけではどうかなのということでお薦めしたい。

「禅と浄土教」これはお坊さんにお薦めしたい。禅と浄土教は御本尊も違うし、考え方が違いますね。両方がどこら辺で仲直りするか、うまく中間論を取るか、そこを鎌倉の浄土宗の本山光明寺の藤吉慈海と言う人が書いている。難しい本じゃないです。

「武家と天皇」今の天皇制に対して、武家がいかに戦ったかという本です。後醍醐天皇は非常に頭のいい人だった。自分が天皇でありながら天皇制はこれでいいのかと考える革新的な人だったが、一敗地にまみれて北朝南朝にわかれた。その頃のことを書いた本です。

「二つの日本史」これはどこで出版したか知らないけれども、著者は高橋富雄という元東北大学教授国文学の先生の書いた本です。古代史ブームのなかで、今の日本人がどこから来て、どのような生活をしてきたかということが議論さ

れている。青森の三内丸山は九州よりもっとすごい遺跡ですよ。東北には元々素晴らしい文化があったんだが、時の政府は自分の都合の良い歴史を書くために東北を蔑視していたんですね。日本の歴史は京都だけが正しいのか、東北を馬鹿にするもんじゃないということを書いている本です。

フロアー：先生は川柳をおやりだということですが、永六輔さんが「寄席に行く医者には名医だよ」と言っているんです。そのシャレた文系の頭というのは先生の人を診るということに影響しているんじゃないでしょうか。

木村：永さんのいうことはその通りです。「大往生」がベストセラーになる前に、「白衣と僧衣」の中に無著成恭さんとの対談を載せて、その後に矢吹清人というお医者さんと三浦和尚と私の鼎談を載せています。その中で出てくるんですけど、今の医学部は数学100点取れば大体合格なんですね。それじゃダメなんですね。今問題になっているでしょう。「雪がとけるとなにになる？」なにが正解か。皆さんは？

フロアー：春。

木村：非常に文学的ですね。他には？

フロアー：水。

木村：そうですね。これ、春にな

ると書けばバツになるんです。水になると書けばマルなんです。おかしい、春でもいいじゃないか。私が小学校の先生だったら、素晴らしいと言いますね。日本の教育の間違ひはここなんです。どっちでもいいはずなんですよ。理科的なものの考え方なら水でしようけれど、でも雪がとけると東北の人間には待ち遠しい春が来る。ハナマルですよ。これ、PTAで全国的に非常に問題になったんだそうですね。私はどっちも正解だと思いますが、今の入学試験は水と書かなければいけないわけです。その弊害が出てきています。

これからを生きるためにおすすりめしたい本

生と死の最前線：藤井實應/水口公信/奈倉道隆：文化書院（1986）

「医療と宗教を考ふる会」講演議事録

おっしやんの茶話：藤本幸邦：ぱんたか（1990）

医者と患者と病院と：砂原茂一：岩波書店（1983）

カラスはどれほど賢いか：唐沢孝一：中央公論社（1988）

敗者の維新史：星 亮一：中央公論社（1990）

医師ゼンメルワイスの悲劇：南 和喜男：講談社（1988）

進化論を見直す：臼淵 勇：津軽書房（1995）

パール博士の日本無罪論：田中正明：慧文社（1963）

禅と浄土教：藤吉慈海：講談社（1989）

武家と天皇：今谷 明：岩波新書

二つの日本史：高橋富雄

講師略歴

木村然二郎（川柳雅号 木念）

出身地 秋田県平鹿郡平鹿町浅舞206

現住所 青森県弘前市茂森町144 / :0172-34-3250

略歴

昭和21年3月：秋田県立横手中学校卒業

昭和28年3月：東北大学理学部生物学科卒業

昭和36年3月：弘前大学医学部医学科卒業

昭和37年4月：弘前大学医学部第2内科（大池内科）入局

昭和43年4月：弘前大学医学部第2内科講師医局長

昭和46年6月：現在地に開業

現職

青森県社会保険審査委員：弘前市保健所結核審査会委員：弘前市医師会
検診センター検診委員会委員長

青森県川柳社常任委員：弘前川柳社常任委員：川柳研究社幹事

がんの苦しみが 消える

山崎章郎 著

1994年 三省堂 刊

1400円

今回私は山崎章郎先生の「がんの苦しみが消える」を御紹介することになりました。先生の著書には「病院で死ぬということ」「続・病院で死ぬということ」「ここが僕たちのホスピス」「安らかに死ぬということ」「聖ヨハネホスピスのめざすもの」がありますが、とくに「病院で死ぬということ」は一般の方々にも多く読まれており、映画化されたこともあり、ビハーラでも上映し感動を呼んだのを覚えていらっしやると思います。

しかし、この本が他の本とちょっと違うところは、ホスピス、緩和ケア病棟ガイドなのです。ホスピスに関する著書は他に沢山ありますが、その多くは理論的な事が多く、ハウ・ツウに触れているのは少ないし、理想論だけで、この本のように

信念を持って実践された事が生き生きと表現されているのは、少ないと思うのですが...

さて、内容はといいますと、第1章、桜町病院ホスピスで働く人々として山崎先生を始め、小金井教会神父吉川敦氏、前婦長小田式子氏、ホスピスボランティアの方達がこれまでの患者との出会いや、インフォームドコンセント、ペインコントロール、心のケア、ホスピス病棟看護婦の仕事、医師としての仕事、ホスピスボランティアの役割について具体的に紹介しています。

第2章では、患者とその家族に対して、インタビュー形式で桜町病院とのかかわりが細かく紹介されています。

第3章では「ホスピス緩和ケア病棟って一般病棟とどう違うの?」と題し、国内のホスピス緩和ケア病棟を持っている病院が紹介されています。内容は詳細で、患者さんの為だけではなく、自分自身にも役立つのでは?と思える程です。

ほんとうに簡単な紹介でしたが、皆さんにぜひ読んでいただきたいと思います。個人的な意見ですが、山崎先生の著書を読まないで、ターミナルケアやホスピスについて知ったかぶりをしている人は必ず読んで欲しいと思います。

(中島美枝子)

医療と宗教を考える会の御案内

木村然二郎先生のセミナーでも入会を薦めていました「医療と宗教を考える会」の説明と勉強会のお知らせです。

「医療と宗教を考える会」は昭和59年発足、昭和60年2月から勉強会を始めて現在にいたっています。勉強会は毎月1回行なわれすでに111回を数え、年1回ほどのペースでシンポジウムを開催しています。世話人代表は聖路加看護大学学長日野原重明氏、世話人には作家の遠藤周作氏やアルフONSデーケン上智大学教授などそうそうたるメンバーが顔をそろえています。また、講演録ばかりでなく多数の書籍も出版しています。

年会費は法人会員100,000円、維持会員36,000円、正会員6,000円、一般会員3,600円、通信会員1,000円となっています、事務局に申し込むと振込用紙が送られてきます。また年会費納入の際正会員は3冊、一般会員は1冊、それぞれ読みたい講演録がもらえます。講演録や出版物のリストも送ってくれます。この講演録が入手できるだけでも入会の価値があるのではないかと思います。

次回勉強会は次の通りです。

テーマ	ホスピス医として思うこと		
講師	森津純子氏（昭和大学病院 緩和ケア室医師）		
日時	平成7年10月26日木曜日	午後6時～8時15分	
場所	主婦会館（JR四谷駅 麹町口）		
事務局	千代田区岩本町2-1-19	ファーストビル3F	
	TEL03-3864-7755	FAX03-5687-6367	

秋田ターミナルケアを学ぶ会主催 シンポジウムの御案内

セミナーでお話を伺いました秋田市の小助川次雄牧師の秋田ターミナルケアを学ぶ会と、秋田生と死を考える会が主催して「病院ボランティア」についてのシンポジウムを開催します。秋田ではまだ限られた病院でしか活動していない「病院ボランティア」ですが、来年3月末で付き添い看護制度が廃止されたあと、益々その存在が重要になってくるものと思われます。是非ご参加ください。

シンポジウム

「病院でのボランティア活動の可能性と課題」

コーディネーター（司会） 聖霊女子短期大学 講師 佐々木久長
病院はどう変わるのか 中通総合病院 医事課長 小林仁
看護婦として 由利組合総合病院 看護婦 佐藤田鶴子
医師として 聖園クリニック 医師 橋本啓子
ボランティアとして 聖園クリニック ボランティア 安宅由佳

日時 10月7日（土）午後2時～4時

場所 秋田県社会福祉会館

（秋田市旭北栄町1-5 TEL0188-64-2700）

入場料 300円（当日会場にて）

●玉川お福さんふるさと浪曲公演の御案内

昨年11月、特養「扇寿苑」と北秋中央病院で生の浪曲を披露してくれました玉川お福さんが再び秋田で公演いたします。今回は師匠の玉川福太郎さんはもちろん、玉川勝太郎さんも駆け付けての豪華なステージです。秋田市と大館市での公演となります。

ビハーラとしても微力ながら協力したいと思い、チケットをあらかじめ用意しています。浪曲好きの方々に声をかけてみてくださいませんか。

秋田市

日時 平成7年10月20日

（金）

午後5時30分開場

午後6時開演

場所 杉のや

秋田市中通4丁目1-15

大館市

日時 平成7年10月21日

午後5時30分開場

午後6時開演

場所 大館市文化会館（中ホール）

大館市字梅町南85-1

0186-49-7066

0188-25-5111
どちらも入場料は2,500円です。チケット御希望の方は袴田（0185-79-2468）までご連絡くださるか、最寄りの事務局までご連絡ください。

弘前大学倫理委員として

講師 弘前市 曹洞宗盛雲院住職 三浦義弘師

1995年10月4日 午後7時より

鷹巣町 中央公民館研修室

木村然二郎先生と共に『祈りと手当て』『白衣と僧衣』を出版されたお坊さんです。若いころ友松圓諦師に師事し、青森に帰ってからも弘前地区保護司、青森刑務所の教誨師として活動されてきました。また、木村先生の薦めで弘前大学倫理委員会専門委員となり、僧侶の立場から医療に関わっておられます。

その弘前大学倫理委員会が先般来たびたびマスコミに登場しています。鹿角市の主婦の生体部分肝移植手術の話題です。弟さんから肝臓の提供をうけ、手術は成功に終わったようですが、倫理委員会の中ではどのようなことが話し合われ、どのような経緯で手術に同意することになったのか詳しくお話をお聞きしたいと思います。

堅い話題を楽しく分かりやすくお話ししてくれる方ですので、是非ご参加ください。

木村先生のお話は気取らず風刺がきいていて時間があっというまに過ぎていきました。楽しい語り口の公演でしたが感動も大きいものがありました。先生の呻きは現代社会に対する嘆きであり良心の叫びであり、それが大きな共感をよんだのではないのでしょうか。またお話を聞きたいものです。皆様のお薦めの本の紹介やビハーラに関する要望や質問などをリポートでご紹介したいと思います。是非お寄せください。宛先は秋田県山本郡藤里町大沢字向山下89(〒018-32)・袴田俊英まで。

ビハーラリポート

第15号 1995年7月13日発行

ビハーラリポート発行所

ビハーラ代表 兼能代山本地区事務局

藤里町月宗寺内 袴田俊英 0185-79-2468

大館地区事務局 越姓玄悦 0186-49-6957

比内地区事務局 小林匡俊 0186-55-1144

森吉地区事務局 奥山亮修 0186-72-4143

阿仁地区事務局 今井典夫 0186-82-2418

鷹巣地区事務局 佐藤俊晃 0186-66-2032